

長崎歴史文化博物館 教育実践報告書  
出会いが生み出す学びのレシピ  
～ 学校 × 博物館 = ∞ ～

長崎歴史文化博物館 教育実践報告書  
出会いが生み出す学びのレシピ  
～ 学校 × 博物館 = ∞ ～

## 学校向けプログラム（館内）



■ ガイダンス



■ 展示室案内



■ 展示室案内



■ 長崎版画体験



■ 職場体験学習

## 学校向けプログラム（館外）



■遠隔授業



■遠隔授業



■移動博物館



■出張授業



■出張授業



## 協力校、パートナーズ・プログラム



■2008 年度報告会



■説明会のようす



■企画展示 見学



■研究員による常設展示解説講座



■教材研究

## ごあいさつ

長崎歴史文化博物館

館長 大堀 哲

かつて“博物館行き”という言葉があった。古色蒼然、なんとなくカビ臭いところ、役に立たなくなったもの、時代遅れのものが並べてあるところが博物館というイメージがあったことから言われた言葉である。そういう見かたをすれば、博物館は既に機能を喪失した過去の遺物の収容所であり、歴史の冷凍庫ということになる。

しかし今や、博物館行きといった言葉は死語になっているといえると思う。決して古いモノを保管しておくだけの過去の収納庫ではない。いうまでもなく博物館は過去のことを取り扱うが、同時に現在のこと、未来のこともきちんと見据えている。時代を超えた文明の伝達装置として機能しているのが現代博物館である。

そのような視点に立って、2005年11月3日に開館した長崎歴史文化博物館は、“進化する博物館”づくりを進めてきた。交流・連携・発見というコンセプトを掲げながらも、大きな理念は、たえず進化する博物館である。その核として、博物館は究極的に「教育」でなければならないという考えのもとに運営に当たってきた。研究の成果は展示や資料の収集・保存などに活かされるが、最終的に人々の理解を深めることにつながらなければならないからである。

私は進化する博物館、博物館利用者にとって役に立つ博物館をつくるために、展示方法であれ、児童生徒の活動であれ、博物館としての「組織化」「体系化」が必要であると考え、その実現に努めてきた。とりわけ、博物館教育の組織化、体系化については教育方法論が未整備であったこともあり、体系だった実施は十分ではなかった。

もとより博物館教育には二つの経路がある。それは（１）博物館側（学芸員や教育担当者）が、来館者（児童生徒、成人、家族、専門家など）に展示（物）や教育情報を参加・体験、解説などを通して行う博物館教育と、（２）博物館側（学芸員や教育担当者）が、学校教員あるいはボランティアなどに博物館の利用法や教育情報を伝達する博物館教授法、学校の教員またはボランティアなどが児童生徒または来館者に、展示の内容や教育情報を参加、体験、解説等により伝える教授法である。

博物館の教育が資料、コレクションを用いた教育活動であっても、この（１）と（２）は組み合わせられるべきであろう。しかし、わが国の現状を見ると（１）の博物館教育（education）よりも（２）の博物館教授法（pedagogy）を分けて考えた方がよいであろう。どちらのパイプを広くするかによって、結果は異なる。

いずれにしても博物館教育は、博物館教育活動の中核であり、博物館教育そのものが博物館の存在理由である。欧米の博物館では、既に「教育」に「サービス」という概念を導

入しているが、わが長崎歴史文化博物館もその思想は同様で、その実践に最大の努力を払ってきており、今後も一層強化を図ることとしている。学校教育との連携の重視、相互補完的な機能の充実を図ることに変わりはない。

長崎の小・中・高校の30人を超える先生が、当博物館「協力校・パートナーズプログラム」に参加していただき、博物館の活用、児童生徒の教育の質の向上のために博物館側と熱心に研究を進められたことに深く敬意を表したい。本報告書は、その貴重な成果であり、博物館や学校の今後の教育活動のモデルとして十分にご活用いただけるものと確信している。

多くの関係の皆様にご一読いただき、忌憚のないご意見等を賜ることができれば幸いである。

# 目次

## 巻頭写真

ごあいさつ .....	1
I 学校との連携 これまでの活動を振り返って .....	5
II 教育普及事業(学校向けプログラム)について .....	11
III 博学連携事業「協力校・パートナーズプログラム」について .....	17
実践報告 小学校編 .....	24
中学校編 .....	147
高等学校編 .....	166
IV 資料編 .....	205